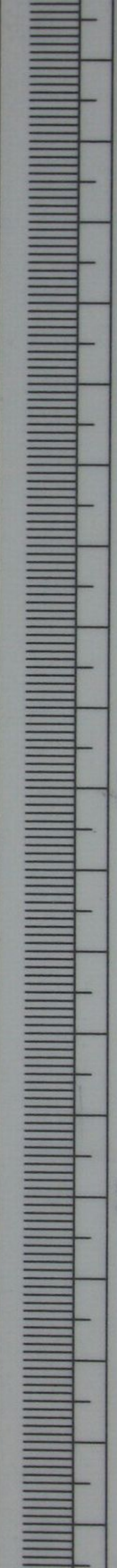




傳記秘事滿津毛全



中村俊定文庫  
文庫 18  
653



75

70

65

序



お集のそみらに凡仇詔き秘授せあがり  
 終りし程をあらよとる二に子らあ  
 是とん秘すのまのゆらりて  
 せりいさひさひしよふのむおのま  
 箋とひますよひちうひを其あくの  
 に交とあは是をこくを歌して今う  
 仇友の脚の解らるるくあつあを詠風た乃  
 自ををたてよものやの何うますめを

の必書

の書一

上巻より下巻の物のあはれの秘書あるはあり  
よりく徳家より案傳しるるはこれに又  
おてもすくうは案く一巻とさなるの秘書  
俳諧の秘書よりこのよりおまつ毛なる世に  
其の年号一はゆるいありぬ

海系

安人冬

三居菴古書



俳諧秘事漢洋毛目録



- 一 俳諧の定法不万民日用の制度ある事
- 一 切字秘傳の事
- 一 花乃句擧げの事并花工芳野花お擧正花編
- 一 三鳥乃事
- 一 徳邦故実并秘変案
- 一 百歌 表八句 口折変化の事
- 兼句法 扱てふも留才之文字留 口句句法
- 月花れ産句ハ花句法 季句と并

一 附合の事 一 法風体口交 三ヶ大事

一 夏合去嫌の事

一 和歌 法風体  
長奇 經奇 旋歌 混本 廻文

一 桃諧 折句 寄冠 物の名 贈答

一 蕉門傳の事 兼 古風 尚流 乃 兼

一 定を失ふ 一 桃諧の差別

一 桃諧 執行 乃 事

終

凡例 兼 大意

一 桃諧の五倫の人情とよくあり身と修め玉家と  
治るれ道ありとらめを願ふすべしや

一 口交とらつものいさよ遠くはあつく秘し 誓紙

一 血料のさふし 志をりて修めらる事 かつが今

一 此書多にこそ秘事を事ありし修めらるる かつが今

一 名月たるのいちちして初心の目とわづらふの

一 事ありしづれば只をさしこれ修めをの記して文を

一 事ありしづれば只をさしこれ修めをの記して文を

かゝるべき人の目にはしつとなくいかに  
 秘とされ詞をさへゆるぎなく半つらる中よとて  
 その字とまじと押してさうらひのどろろとて  
 あゝぶ一字一言又万色のまけんおのまゝありと  
 志るべく是と見る人の眼かより能くこの極意を  
 存せしむ一且の執りカウの力よとるべきや

一秘傳といつるおのれとてわん工對一は極意なるは秘  
 意は他人に伝ふ必よたまらぬは極意とていふもの  
 是は極意のありてまじりて極意の極意は極意なり

句のいふはまじりて極意とて極意は極意なり  
 中よとて一と秘傳は極意をいふは極意なり  
 御をいふは極意なり極意は極意なり極意は極意なり  
 やゝとて極意は極意なり極意は極意なり極意は極意なり  
 かりとて極意は極意なり極意は極意なり極意は極意なり  
 大なる極意は極意なり極意は極意なり極意は極意なり  
 助とて極意は極意なり極意は極意なり極意は極意なり  
 一とて極意は極意なり極意は極意なり極意は極意なり  
 考て極意は極意なり極意は極意なり極意は極意なり

事をのこも<sup>テガ</sup>扱こすの者まづく<sup>コト</sup>に<sup>コト</sup>て  
 口<sup>コト</sup>文を<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>り<sup>コト</sup>た<sup>コト</sup>終<sup>コト</sup>ふ<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>用<sup>コト</sup>ひ<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>も  
 幸<sup>コト</sup>た<sup>コト</sup>ど<sup>コト</sup>し<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>意<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>毎<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>ざ<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>  
 い<sup>コト</sup>ち<sup>コト</sup>じ<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>つ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>ば<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>ず<sup>コト</sup>や  
 貞<sup>コト</sup>徳<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>翁<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>好<sup>コト</sup>愛<sup>コト</sup>ふ<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>ホ<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>い<sup>コト</sup>つ<sup>コト</sup>り<sup>コト</sup>た<sup>コト</sup>懐<sup>コト</sup>紙<sup>コト</sup>  
 經<sup>コト</sup>冊<sup>コト</sup>ホ<sup>コト</sup>ふ<sup>コト</sup>ま<sup>コト</sup>ぬ<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>也<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>や<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>き<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>亦<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>邦<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>も  
 文<sup>コト</sup>や<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>で<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>規<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>杜<sup>コト</sup>終<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>正<sup>コト</sup>言<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>中<sup>コト</sup>入<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>教  
 正<sup>コト</sup>位<sup>コト</sup>つ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>い<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>感<sup>コト</sup>心<sup>コト</sup>せ<sup>コト</sup>し<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>御<sup>コト</sup>筆<sup>コト</sup>に<sup>コト</sup>記<sup>コト</sup>せ<sup>コト</sup>り  
 や<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>し<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>初<sup>コト</sup>心<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>懐<sup>コト</sup>づ<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>ま<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>ぬ<sup>コト</sup>り



俳諧祕事 漢津毛

古音撰

○俳諧の實情は万民日用の制度なる事

凡<sup>コト</sup>俳<sup>コト</sup>諧<sup>コト</sup>とい<sup>コト</sup>ふ<sup>コト</sup>本<sup>コト</sup>朝<sup>コト</sup>人<sup>コト</sup>倫<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>事<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>天<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>感<sup>コト</sup>應<sup>コト</sup>  
 神<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>誠<sup>コト</sup>交<sup>コト</sup>ゆ<sup>コト</sup>ま<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>れ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>人<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>心<sup>コト</sup>神<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>  
 を<sup>コト</sup>さ<sup>コト</sup>め<sup>コト</sup>身<sup>コト</sup>脩<sup>コト</sup>よ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>し<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>家<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>齊<sup>コト</sup>明<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>し<sup>コト</sup>た<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>  
 平<sup>コト</sup>天下<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>累<sup>コト</sup>あり<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>も<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>ぶ<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>ま<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>さ<sup>コト</sup>め<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>人<sup>コト</sup>と  
 多<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>れ<sup>コト</sup>ど<sup>コト</sup>人<sup>コト</sup>情<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>げ<sup>コト</sup>し<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>只<sup>コト</sup>よ<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>書<sup>コト</sup>物<sup>コト</sup>よ<sup>コト</sup>む<sup>コト</sup>  
 故<sup>コト</sup>多<sup>コト</sup>志<sup>コト</sup>あり<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>が<sup>コト</sup>あ<sup>コト</sup>ら<sup>コト</sup>る<sup>コト</sup>は<sup>コト</sup>り<sup>コト</sup>唐<sup>コト</sup>士<sup>コト</sup>肉<sup>コト</sup>れ<sup>コト</sup>其<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>詩<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>い<sup>コト</sup>ひ  
 詩<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>官<sup>コト</sup>人<sup>コト</sup>わ<sup>コト</sup>り<sup>コト</sup>て<sup>コト</sup>民<sup>コト</sup>間<sup>コト</sup>の<sup>コト</sup>纏<sup>コト</sup>糸<sup>コト</sup>を<sup>コト</sup>執<sup>コト</sup>り<sup>コト</sup>く<sup>コト</sup>ま<sup>コト</sup>と<sup>コト</sup>

之正聲也一音律也恨之奏一其正不正也考  
 志也一一人乃年以在也一廣民之感也  
 よくあるといふ必也の制なりといふことなり  
 万民を以て治むれば治ありといふことなり法式ありて  
 制といふ大小を懸を分つて一律といふ一律を  
 十二律也十二調子といふ五音十二律を以て地の  
 氣を和らげ八風を調へ万物を養ふこと一樂の  
 和を和としていふ也一君及父を和する之禮也一必  
 樂ありて和を尊んぬる也一必終を以て和を教と

なるも也一其和を尊んぬること一氣を和らげ  
 其樂よく和らぎて好み人乃和と感動するもの也  
 其樂よく和らぎて好み人乃和と感動するもの也  
 樂の律といふ一音律の和といふ一人の家といふ  
 和といふ余人は是を志する事一吾邦の和といふなり  
 古の和といふ一和を和らぎて好むこと一終なり  
 樂ありて和を尊んぬること一必終を以て和を教と  
 といふことなり一今揚朗誦といふもの今和を和らぎ  
 といふ曲なりたを和らぎて好むこと一朗誦といふこと一任大和の

和漢朗詠と詠之とこれハ万民の好む曲也玉と詠  
 上つるも心と詠とくをばむれにありけり  
 きくおとこり名のこみりて故実と成今昔中  
 猿楽田楽お狩りの俗樂出でて近頃ハ浄  
 杯とくはるかちりて翠も尺ハも都俗の器とて  
 こそ平さともきくげならぬ誠ハ律ハ度ハ量ハ衡ハ  
 尺ハ寸ハ下制度定まらぬ古の所ハ今も重トりの  
 日本あり。度ハ分寸丈リ也。量ハ合升斗斛の  
 衡ハ秤なり。是十二律黄鐘の管より起るけり

つるところとらむべし万民くをば。律ハ調子を  
 調子とく万民と下海とて。歌ハ女童の  
 耳にきく今ハ万民の好むおもひもあは  
 いとて是の耳にけり。詩ハ雅文學者也。曲ハ  
 人の媚とけり。童女のあつるもよなうべし。詠ハ  
 俗語ハ俗語。平詠ハ和漢と下のるべし。詠ハ  
 一ハにけり。心とく人好むをちりり人の心と  
 ころる名の志をこく。名は遠く。名は遠く。名は遠く  
 律ハ調子。下制ハ下制。度ハ度。乃ハ乃







○切字秘傳之事

○切字の音韻ヲニのあやうありん白中お心の余らふと  
 つつ十八字の古法の編あり二字と字二段と段も  
 接殺切も。ん切の惣ありてまうてたうとまぬり  
 編ありをうふ也。申の切れるとてうふ名  
 つつとゆひ名目の初まの役と志はげし古式乃  
 切字の十八と名付るもの。と申中より技を案を  
 つつとて古今教々の名目とあるう結の三百餘  
 思と無邪のと字の秘とかなん初られや

名目おかりりて振るるまうとまうとまうとまうと  
 自回ジモ自ジ言タウするふありより二句をの働をあら  
 其官コタとて言ふのでおをともと切字ありよを  
 口ケツ交ケツとてたよりとて

○哉カチの切字とて名目の改むるは定と祢歎る  
 技ありおひいおの切字を又りやしてウタカヒ  
 祢歎は今のとよよりとておと哉の目  
 祢歎ありとジヨ切字を添てかありい切字を  
 添ておとよとて花とるおとらあも花足哉と

りよも一休あつらふ家よらととて決て入ちしひく  
哉とちあつらふと志ばげ慈あかあつらふ死法あつらふ  
いひ十七字に死あつらふも白布にあつらふも  
まぬの働あつらふて也よてても死あつらふあつらふ  
縁あつらふ切字あつらふかりげあつらふ死法の切字あつらふ  
あつらふ切字あつらふ法よながりあつらふりあつらふあつらふ  
まよしあつらふ初あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

りよも一休あつらふ家よらととて決て入ちしひく  
哉とちあつらふと志ばげ慈あかあつらふ死法あつらふ  
いひ十七字に死あつらふも白布にあつらふも  
まぬの働あつらふて也よてても死あつらふあつらふ  
縁あつらふ切字あつらふかりげあつらふ死法の切字あつらふ  
あつらふ切字あつらふ法よながりあつらふりあつらふあつらふ  
まよしあつらふ初あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ  
あつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふあつらふ

出るやまゝして初心のくさるるはくねらうて  
脚をたのむ一白くは添削を待てゑるがや  
○あま切字あまふ有る一白と出せし

是つしとさうり花乃よりれ也 貞宗

此白うれと句を添て夢あり

あくまされてたうくあう人きれ権 其角

此句人こそあきの権あれと句を添て夢あり

はくくもあまれわためをえ

是もうれと句を添て夢あり余らはと

争侍乃れ花より権え 七世

此白と蕙心の秘授とより白他の三作あま

これとけち白と秘するあま授てといふ句を添て

裁といふは活定の秘を添ていふてといふと添て

と心ね花よりも授あま西向かんとと花と對て

の風情をいふありといふ添て入はと添て

是つのもね花とあまはけあの心はくは此白

はくといふはくは此白と授の妙をいふあまは

あまは人をいふあまは











神書

神書

はるより白牛に哉をよくせりていねん

此卯と下れたる成ゆのなき人せりの言り

或ハハ烟をとりおしたるたがひおまよふ人合は

○曲<sup>キヨクセツ</sup>節<sup>チ</sup>地乃とつていね及白より付合よま

「曲ハ時の変なり たまにたまに曲の他をいふとの

「節ハ烟のたがひ 一白の凡体をそとく曲のとり合を

「地ハまをとりていね人の身よまゆゆるいなる

まよふ人の身よまゆゆるいなる

まよふ人の身よまゆゆるいなる

同 節 曲 地

曲はわらをよむるといふ平より第一より

凡体のまよふとまよふ人の身よまゆゆるいなる

まよふ人の身よまゆゆるいなる

此句初ハのいねをいふなりして切字あり

べく<sup>カク</sup>都て平のいねいふなりして白の面ハ切字

なるれども下段よりいねをいふなりして白の面ハ

まよふ人の身よまゆゆるいなる

りんとははるよりいねもまよふなりして

神書

神書

成を白地の働よりよく考て切まゝにふりて  
る即ちをさるる物もあつてさるるものよりさる  
於るものよりかゝる其の傳の切まゝにあらうや  
群をさるるもの働あつて必ず押さるるもの  
あつて恥をかへるは地門の對して傳を  
くくはるる物もさるるものをさるるものと  
門下の働よりあつての

○切まゝの法をさるるものよりさるるもの  
使して切まゝの法をさるるものよりさるるもの

<sup>オキテ</sup> 携へる切まゝにあらうと考てさるるもの  
さるるもの法をさるるものよりさるるもの  
中さるるもの法の働は地獄にあらうと考て  
人の死の場よりあらうと考てさるるもの  
念を中さるるものよりさるるものより  
さるるものよりさるるもの法をさるるもの  
よりさるるもの初に物より初に法の法をさるるもの  
より物より初に物より初に法の法をさるるもの  
より物より初に物より初に法の法をさるるもの  
より物より初に物より初に法の法をさるるもの

○切まゝ

○切まゝ



神書

神書

是の花もなりとていふ花の由はて花の種よりて  
分別あつたら其様ののり花ありて一花あり  
働あつて一花あり花の種を二不とて宗もは  
るあつて一花ありて一花ありて一花ありて  
心持のありて一花あり

○花より一花を付ぬるは花の由とて一花ありて  
あれは花を付ぬるは花の由とて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて

○花より一花を付ぬるは花の由とて一花ありて  
あれは花を付ぬるは花の由とて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて

△ 花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて

△ 花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて

是の花もなりとていふ花の由はて花の種よりて  
分別あつたら其様ののり花ありて一花あり  
働あつて一花あり花の種を二不とて宗もは  
るあつて一花ありて一花ありて一花ありて  
心持のありて一花あり

花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて  
花の由とて一花ありて一花ありて一花ありて

神書

神書

ちんちん梅のあかたれ乃道

是の赤い花とさくらが赤かきくはあかたれ  
花とあかたれすがあてける散りさくらとあかたれ  
あかたれかきりさくら梅とあかたれのあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ

○さくらさくら梅とあかたれあかたれ  
梅とあかたれあかたれさくら梅とあかたれ  
○正統のさくら梅とあかたれあかたれ  
さくら梅とあかたれあかたれさくら梅とあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ  
あかたれあかたれさくら梅とあかたれあかたれ

花乃をそと書教とする正花備れし味とる  
 びざかりよのたがうづらふもいざうてちばいあまを  
 物まの白くしるる中其人のちれちてはくはる  
 ちのあれいよくはくききて其書き乃を変化より  
 り花とかりしよくはくらたふんばいそとくふん  
 働なりと感ふる程れおしよそ者い  
 身体を好むいふるよかちるい昔より  
 いまもむむいふに花とくしるるい  
 子御と信じてぬよはくはるちあうまう

花のいふと花たふたれくおのあまめれを  
 いふに花はあふむいふにふらぬいづれ  
 わくはあまはいづら正花備の口徳といふの  
 何ゆゑかくまてむらうく徳花とくはの  
 子御といふに花のいふ書のお後とふく老  
 花といふに花はあふむいふにふらぬいづれ  
 かくはあまはいづら正花備の口徳といふの  
 何ゆゑかくまてむらうく徳花とくはの  
 子御といふに花のいふ書のお後とふく老

遠をよ切よきよしんのみあはれに初らるる  
何となく花の香いりかきしと海しんま  
かきしと執りたるてしを成づくあはれ  
古今傳きよあき何子首に伝へる執りて  
杯恒劍さあき方ゆく遊遊と其執りあきて  
何ほど秘傳伝束を解ふくんとさきしを  
らゆふらがはれぬしとくふふくあはれ  
そらんこの物なりし次第よとあはれにさくら  
ふらたらつてあはれと月あつてとあはれ

あつ切をよめりてあはれと執りし海にて  
ケニツウ  
あはれのしとあはれとあはれとあはれと

○三鳥乃事

○百子なるよぶこき。稲あせきむらさきの  
秘伝ありきを古今のときとてあはれ  
あはれあはれのしとあはれとあはれと  
あはれあはれのしとあはれとあはれとあはれと  
あはれあはれのしとあはれとあはれとあはれと  
あはれあはれのしとあはれとあはれとあはれと  
あはれあはれのしとあはれとあはれとあはれと







（一）

一 舊の築新きふをよむ地あるをよむ

一 この山麓よみ 汐平ノ字 小野あり

一 祇宮のいへ廻。佛ヲ中子。神ヲ海底。塔ヲ阿良ノ街

寺ヲ瓦葺。僧ヲカミナガア。尼ヲカミナガトキ。齋ヲカミナガトキ。片膳ヲカミナガトキ。七言ト云

死ヲホ保留。病ヲ夜須免。哭ヲ塩壘。血ヲ阿世

打ヲ塩。穴ヲ園。墓ヲツツナシ。壤ヲカミナガトキ。肉ヲテム。七言ト云

一 此堂ヲ香燈。優婆塞ノ角。若

一 石爰よみ 内裏のより 石爰のよみ 石爰のよみ 石爰のよみ

一 一 枝折るるのよみ 一 爪本の菊のよみ 一 其曉いぬ 一 若る鳥のよみ 一 執人との内裏

一 又ハ内裏 又ハ神社

一 又ハ神社 又ハ神社

一 又ハ神社 又ハ神社

一 又ハ神社 又ハ神社

一 又ハ神社 又ハ神社

（二）

（三）



一 ことなきはたのふしむしむまふしふし二股工ヒタレン草花草花は  
 むのふりけふふしのまて雨の止とほはまふふふ  
 習ひよけあひしとしりふかくのごとくもはりて  
 こそや此處のふふあふ集落のふふふはまふふ  
 初ふ何をなく見付たや此所是に准てあふ  
 ○雲クモの影カゲは文モノと成ナリ○雲クモの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○海ウミの影カゲは文モノと成ナリ○海ウミの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○木キの花ハナの影カゲは文モノと成ナリ○木キの花ハナの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○夜ヨの影カゲは文モノと成ナリ○夜ヨの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○夜ヨの影カゲは文モノと成ナリ○夜ヨの影カゲは文モノと成ナリ

○雙アハツキの影カゲは文モノと成ナリ○雙アハツキの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○朱アカの影カゲは文モノと成ナリ○朱アカの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○初ハツの影カゲは文モノと成ナリ○初ハツの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○名ナの影カゲは文モノと成ナリ○名ナの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○神カミの影カゲは文モノと成ナリ○神カミの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○附ツケの影カゲは文モノと成ナリ○附ツケの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○村ムラの影カゲは文モノと成ナリ○村ムラの影カゲは文モノと成ナリ  
 ○村ムラの影カゲは文モノと成ナリ○村ムラの影カゲは文モノと成ナリ

○恋入句平秋の句はさしてせむく

○花あはれ恋をせむく

○揚句い恋くもはるはれ後や

○同發句の字せむ百韻子の句あ後句は後せむ

○またあ句引揚句と他考をせむ

○管の發句に強の強ヤあゆ句と苦うく

○新式の上意まの者或は初もの句はさし

するを押しんあさ人功者のはさしあさ

くらの強争のなま入まを強さすま

○二発二句二句二句の物らはの付あは物

物く一まのひかり

○あ越娘よもの二発あまはあゆのくはあり

くし五句七句薄たはあさあはあはあ

よりてあ書有ぶあああああああああ

○柳夜月あれたあひあああああああ

あああああああああああああああ

あああああああああああああああ

あああああああああああああああ



夫と是と其ののいしんをなるの切まはつていり  
 振ハの音字ハあゝあゝ二つとある一つは体の強さをいひ  
 して作らるる鬼とあらむ。中二つは是より万物乃  
 び始りて至る鬼人のこととある一つは夜をいひ  
 弱きこと振るての字の字は夜をいひてふえを次の  
 白におゝるんとは。白をいひて百詔と成るの  
 不ちれは物として測られ御をさるしし決められ  
 付安かゝるるあやう。又白ちとある一書はの地と  
 いふべく。七白ちの月の海をて風物れハ収ハ解ハなる

ふう。八白ちの月のまエねハまハいハひ。夜ハのハ例ハのハ法ハがハあハるハ  
 夜の付白のいりりともさハかりハちハさハらハうハあハやハんハとのハま  
 ありと。至る飛のスカハたハ極ハらハうハ二ハ卦ハはハ季ハ八ハ卦ハはハ地ハを  
 志れは其中にゴキハヤハウハをハあハらハいハすハてハ夜ハをハ表ハすハるハをハ  
 ありて一書はの形ハ四面ありていふ後一書はを  
 驚ハかハてハさハらハはハ法ハがハもハ一ハ年ハのハちハまハのハおハしハをハ  
 考ハるハをハ化ハらハりハまハをハ志ハれハらハあハりハ  
 〇にちるるるらりハ物折ら付らるるあり成る  
 月花の府は倭武ともさく書を世法の終ハりハ







あまのいさむらぎはるかなれは是としてあまのいさむらぎ  
齋字とらうくちりあまいと合体あまを習と成

いさむらぎのあまはるかにいさむらぎ 改歎

うゝれてはあまの目とあまのあま 改歎

是のいさむらぎを習と成てあまと習ふ人の二指を成て

其のいさむらぎを合意たるとさやまといふははと成

あまといさむらぎをいさむらぎと習と成たる

あまをいさむらぎといさむらぎと習と成

二指と指類くちり

又握るふらの中へ

物の中へ握るの一本指くちり

あまのいさむらぎとあまのいさむらぎ

連てあまのいさむらぎのあまのいさむらぎとあまのいさむらぎ

てあまのいさむらぎのあまのいさむらぎとあまのいさむらぎ

あまのいさむらぎのあまのいさむらぎとあまのいさむらぎ

あまのいさむらぎのあまのいさむらぎとあまのいさむらぎ

あまのいさむらぎのあまのいさむらぎとあまのいさむらぎ

あまのいさむらぎのあまのいさむらぎとあまのいさむらぎ





〇社名

〇三十五

〇名所の花の一巻のそ尾あれはま久珍花原の  
 へさなるはと自ひの花といふ事かえりま  
 遊名あては一切その日其金の有源のころと  
 此花よ自ひのこはまるといふ事いふ事  
 まうて数々のいふことしてよとて  
 一巻のそ尾といふごとく書をたぐを自ひの花と  
 りつちおぼゆるは日花といふ書は短くまうて  
 ぶら交白或は花の交白れはむらうと  
 ぶらありはと一巻のわらうといふごとく名所乃

花引あけておく出るとはまうて  
 けさるる中とまうて一巻あせ

〇名所の花の白と合体のありは  
 字のそ心まうての件といふ事と有る  
 其花の根を考名所の花の子細ありて  
 一巻はれ花ありはまうてあり  
 先ら一巻はまうて花の入るは  
 花の調のやうにありはかひて  
 白知つるはまうてありは

〇社名

〇三十五

〇附合の事

〇附合の事

法凡体口文  
二ヶの大奉

〇服才之に句ちまくの付方のあひ離しあるひの  
初意は法善。初意。別く。色。皮。肉。骨。等。事。初  
又ハ五義十体。三義五体。そ。お。あ。の。徳  
付。た。ら。し。と。句。を。ち。り。ん。け。て。の。是。ぞ。と。わ。ら。て  
初。心。の。い。た。げ。さ。い。う。あ。ら。ん。の。そ。入。用。と。記。し  
か。ら。ん。暇。之。付。ま。ら。ぬ。を。協。を。付。ら。し。信。と。付。ら。こ  
時。分。と。付。ら。こ。ら。を。と。取。て。は。法。善。と。付。ら。こ。ら。と  
の。こ。い。ひ。に。さ。ら。つ。又。お。句。の。詞。と。さ。ら。し。拍。は。あ。つ。也

付らもあつて七名八体とらるる業ド方ハ  
有云。今。秋。道。句。起。承。向。付。拍。子。色。を  
凡。此。名。目。も。も。志。く。長。し。又。八。体。と。い。付。方。ハ  
其人。其。物。時。分。時。良。時。宜。又。相。親。相。面。親  
又ハ。自。仲。親。善。等。ヤ。志。に。移。り。見。ハ。乞  
又ハ。平。に。つ。子。風。信。詞。遠。心。お。對。埋。付  
凡。と。根。よ。さ。わ。く。付。ら。し。付。ら。あ。句。の。法。善。と。初。意  
の。と。さ。ら。び。と。事。ハ。南。無。の。業。事。と。考。へ。て。拍。付。方。ハ  
いつ。拍。を。ぞ。其。場。り。兩。親。と。ユ。支。は。ら。ん。人。こ。の

あひ入るるにやあはれなるものほかにのよからん  
程も終るのちさう思ひにぞ(懐)あはれなるも  
其理一体とみるべし

きこひの海が波くちあはれ

きこひの海が波くちあはれ

あはれなるにやあはれなるものほかにのよからん

是(懐)あはれなるものほかにのよからん

あはれなるものほかにのよからん

あはれなるものほかにのよからん

かくて曲る地の流階のきうしてあはれと付白と

二のちの流階を曲るを付するなり

あはれなるものほかにのよからん

一とむの流階の自をあらで

つるをあらで一とむの流階をあらで

あはれなるものほかにのよからん

あはれなるものほかにのよからん

あはれなるものほかにのよからん

あはれなるものほかにのよからん



付て人のしるまびいひよらるるをいふ業すといひ  
一ツありお越へ梅とせざる中へ一ツあり白の件を  
よくはかるゆ此れおまじ身の大事の事といふ人  
必付方の法にあらざるまお南無のまといひ  
ありてしるまをなすといふ

百ある地三十三

かくらぬよく  
付て見る台なり

き白二千三

あつりさび又のりうまひ  
かろくといふ

白白十七

巴がよるをとりて西らく  
つくりちり

格介十七

このこちあつり付るたふ  
あつる夜ふけ付て感ふ

凡いふ一よりかくら定つれらるるをたの次第よ  
さあつありてそよ曲る地の白をいふ  
十並に十色あはしめつれらるるに西の  
白をいふとせし一色もたつちあつるをいふ  
とらよて一向の白をいふとらよて  
掌<sup>トモガウ</sup>ありてまを意門の付方とらよる格<sup>カシヤウ</sup>介の  
そまをいふとらよ成作<sup>シラウ</sup>のまをいふ  
とらよて意門とらよる格<sup>カシヤウ</sup>介の  
まをいふとらよる格<sup>カシヤウ</sup>介の



徳徳と古人ありとる秘部ありて今より  
 徳徳のありしより凡そ命を授けらる見後一  
 再之目立りのいなき事類とてあられし事  
 ありてすむれり理の徳徳をたてよとての  
 かさなりてわくんと致と急しきこと  
 徳徳と何のかさなりありて何れもよむ  
 古風と事流の遠くありて増減と牡丹と  
 ふうんもあつたことありていふこと  
 二事いふこといふこといふこといふこと

けいせいとたがひて徳とからうたふと定む  
 其のそとをよむと物よりうたふと定む  
 といふの徳徳平徳の九投といふこと  
 けいせいと有べく又いふこといふこと  
 ありて今この徳徳といふこといふこと  
 のたがひも有べしといふこといふこと  
 ありていふこといふこといふこと  
 人倫の二つと定むこといふこといふこと  
 目を再とすといふこといふこといふこと

風のふりたるをばはるかにほろけりて人傷の  
 らまらふもたはらふもたはらふもたはらふも  
 其外一歩十歩百歩一連なりとてうらむるを  
 このふりたるをばはるかにほろけりて人傷の  
 驚くも味もさるるもさるるもさるるも  
 へづくやみ紙有拍子も湯のひもさるるも  
 めもねわりのしき長角よむとけをゆりて友を付  
 極物とてはらへくねふ<sup>スキ</sup>なりて又もはらへく  
 人多くをねて少もホ一なりてねふもさるるも

以てホホをうらむるは是を例うとてはらへく  
 の古法をわらへくはらへくはらへくはらへく  
 中へはく西終速速の用無用とてはらへくはらへく  
 又偏の人数を測へて平話よはらへくはらへく  
 の地はらへくはらへくはらへくはらへくはらへく  
 ようてはらへくはらへくはらへくはらへくはらへく  
 づくはらへくはらへくはらへくはらへくはらへく  
 是もはらへくはらへくはらへくはらへくはらへく  
 一歩のやみ紙有拍子も湯のひもさるるも



是の下れ七文字なまこちり

とらるるは新しきねむとのこしとらるる地と

是の中の七文字なまこちりまの七文字なまこちり

白のあまりて又たなまこちりては小町のおかや

体の物とてなまこちりてはなまこちりてはなまこちり

只古くはなまこちりのなまこちりてはなまこちり

○廻文 是のなまこちりてはなまこちりてはなまこちり

あつてはなまこちりのなまこちりてはなまこちり  
かたはなまこちりのなまこちりてはなまこちり

○詠物 是のなまこちりてはなまこちりてはなまこちり

又及指事この歌集よ入るのなまこちりてはなまこちり

さやのなまこちりてはなまこちりてはなまこちり

なまこちりてはなまこちりてはなまこちり

詠物有様一俳諧二雑歌三俳諧四詠物五詠物六

五詠物六謎字七空八都九都十都十一都十二都十三都十四都十五都十六都十七都十八都十九都二十

此のなまこちりてはなまこちり

○折句 一のなまこちりてはなまこちり

をらるる山このなまこちりてはなまこちり  
なまこちりてはなまこちりてはなまこちり

○折句のなまこちり 是のなまこちりてはなまこちり

をのこころをこころに秋うけたりとて

をのこころをこころに秋うけたりとて

をのこころをこころに秋うけたりとて

をのこころをこころに秋うけたりとて

○物名 是にかぐ一歌也

くさくさな草のこころをこころに秋うけたりとて

○贈言 是をこころをこころに秋うけたりとて

くさくさな草のこころをこころに秋うけたりとて

くさくさな草のこころをこころに秋うけたりとて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

又あつてはとらふあり私あのを初とて

○秘訣

○四十一

吾を以て信ずるは、うらやまを以て信ずるより、  
うらやまの心を以て信ずるなり。

汝を以て信ずるは、うらやまを以て信ずるより、  
うらやまの心を以て信ずるなり。

かくは、戸を以て信ずるより、  
戸の心を以て信ずるなり。

汝を以て信ずるは、うらやまを以て信ずるより、  
うらやまの心を以て信ずるなり。

文廻 けさたんとのちや、葛南の富田は、其の角

けさたんとのちや、葛南の富田は、其の角

散むるは、又咲花乃、如くも、古昔

あさふりて、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

そが、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、  
あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、

山中の、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、  
あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、

秘訣、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

○慈門傳之書、古風、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

○慈門の秘訣、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

秘訣、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

此、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、  
いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、いそぎ、

○秘訣

○四十一



傳り傳るを真と云はば傳令を去來がね傳はく支考のたふ有まう  
 平青子ら所持の今冠里の傳はく傳來と記す此のたふ條の傳と支考  
 才より代りて中匠の傳はく傳を續傳といひしは傳條のたふ  
 中もたふ傳はくたふのたふは傳條の法を定てせせを傳乃  
 秘決と云ふひしは傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく  
 傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく  
 傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

其外種々の書を出しを我義の傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく  
 其角流の中も其はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく  
 伝はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく  
 と并敷く一白能余の條の支考はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく  
 支考はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

返書の手傳る其因と十條條條條條條條條條條條條條條條條條

とつら支越の目と記しるなり又飛段まはせし

一冊傳る 支考はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

の傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

さへ傳書のたふひわりて今も其狀とて人志くねん

多く傳書の傳とてかり傳人も多うるべし 支考はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

せいこの伝をやうりてる傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

あもわり又用ひて此傳も傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

あまけひしは傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

たふはく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく傳はく

いう中しありのそ家々の技をちりねきして高流有ぶと  
 かりの貞徳立南の徳信の教記にていふごと連ぶの  
 屋をこまめれどその流とまじりてあはれ徳信乃  
 自らをまじりて言れとまじりていふなりとや云てし  
 字紙のまじりて神影のむ様とてまじりて又まじりて名影の  
 花をまじりて又まじりて花をまじりて又まじりて  
 むあ一採合伴美にまじりてあはれありのまじりて  
 例にひらきしれとまじりていふるまじりて名影のまじりて  
 二百年ま連初の名影よりのまじりていふるまじりて  
 信流をまじりて人をまじりていふるまじりてあはれ  
 史をまじりていふるまじりてあはれありのまじりて

鬼衆の感するのうか影流のまじりていふるまじりて  
 今の徳信のまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 及ぶまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 中ぶる徳信平流とて地り互の場と新築と  
 いふるのまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 他つて對して徳信とまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 影をまじりていふるまじりてあはれありのまじりて

昔のまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 今をまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 昔をまじりていふるまじりてあはれありのまじりて  
 今をまじりていふるまじりてあはれありのまじりて



あてて息をすゝる家近もまげもくちあつたは体よ  
 一とづゝと息をすゝる家のしつあをわめてきつたの  
 能くあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 せつとあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 あつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 志をうりまを老角や五れをみ入る道とこよとらふ  
 けまうあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 志をうりまを老角や五れをみ入る道とこよとらふ  
 てあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて

奇にゆくゆくまをわめてきつたのしつあをわめて  
 志をうりまを老角や五れをみ入る道とこよとらふ  
 けまうあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 志をうりまを老角や五れをみ入る道とこよとらふ  
 てあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 志をうりまを老角や五れをみ入る道とこよとらふ  
 けまうあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて  
 志をうりまを老角や五れをみ入る道とこよとらふ  
 てあつたのしつあをわめてきつたのしつあをわめて

風雅のるふはるまじくた半あり

○高代の魂結付んばとらん河程まゑる斗を  
出たれいとそ半にると付ねらばとお意不  
付らの有様工安ありのそらふ却る付れあどに  
こましく二白ふゆの儼もたれ白とこらゆをう地  
ちりと様まゝの理をいふにたつてさうねん  
おとりの良ととすの理をきくねんは白の  
御をひいて付合ふむらさきまほをくらば  
後白とて半の保るあを後白切字かて

じうけいひつとひてまじく執云とナセよう  
ナ高字あも猪もひまを扱を席にらとてあ  
余人のちがでわすして出まこの務負を好むら  
風雅のまろげあつてわすれ法おの教つれの  
先師の流まゝあつてまを風儀とまゝとらるる  
のろとちがねる風雅の人とあつて魂結の磨あ  
こそ人といふも是國へまゝとて魂結の磨あ  
まゝのまゝとてわすれて附の務負あつてま  
たは道ふと魂結の人とあつてま

○ 近頃の御人只付合とのこきてあはせ給あはら  
 さん西のむらじおひてはとも通うあはれあ  
 襲<sup>ウラカト</sup>角<sup>カト</sup>よりするものかざりてまじり御借<sup>御借</sup>ま  
 控<sup>コイコ</sup>おふりぎやむむごふに付向かうもよく  
 纏<sup>チン</sup>冊<sup>サツ</sup>好まぬる時半てきくものこもま  
 陰<sup>エ</sup>後<sup>サシ</sup>に付向成りのくもあ人の接<sup>ア</sup>授<sup>サツ</sup>御<sup>セ</sup>あ  
 邪<sup>ヤ</sup>さうとさくさくむらうがらあり口を  
 こけた時よひくむら御<sup>御</sup>進<sup>チン</sup>後<sup>ゴ</sup>するあり平白  
 めこたれり趨<sup>チ</sup>向<sup>コウ</sup>よりあはらさたあはれあはれあはれ

ゆゑに不月<sup>フツツキ</sup>五<sup>イ</sup>狗<sup>コ</sup>中<sup>チュウ</sup>白<sup>ハク</sup>の酒<sup>サケ</sup>あはれはらうては  
 事<sup>コト</sup>どもこまの肉<sup>ニク</sup>あ人のあまもすむら御<sup>御</sup>  
 うに白<sup>ハク</sup>只<sup>ただ</sup>一句<sup>いちご</sup>あはれ御<sup>御</sup>人<sup>ひと</sup>成<sup>なり</sup>じあふよま  
 かんし人<sup>ひと</sup>あもあはらう白<sup>ハク</sup>あはれも格<sup>カク</sup>あはれ  
 五<sup>イ</sup>撰<sup>セン</sup>あはれはら御<sup>御</sup>人<sup>ひと</sup>成<sup>なり</sup>じあふよま  
 芭<sup>ハ</sup>芭<sup>ハ</sup>あはれもあはれはらあはれはらあはれはら  
 う一<sup>いち</sup>野<sup>の</sup>山<sup>の</sup>あはれあはれはらあはれはらあはれはら  
 うあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ  
 其<sup>その</sup>あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ









此を以て佛也其師の癡をうけし取てて佛と稱せり  
 其の癡へなり又とわづらふを佛とせしむるは  
 一の佛の癡の癡を以てて佛と稱せり初んたし  
 彩色を以てて佛と稱せり西土に於ては佛の  
 うつりよく佛と稱せり佛の癡を以てて佛と  
 稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を  
 以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり  
 佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を以てて  
 佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の  
 癡を以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と  
 稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を  
 以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり

佛人ありては佛と稱せり佛の癡を以てて佛と  
 稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を  
 以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり  
 佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を以てて  
 佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の  
 癡を以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と  
 稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を  
 以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり  
 佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を以てて  
 佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の  
 癡を以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と  
 稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり佛の癡を  
 以てて佛と稱せり佛の癡を以てて佛と稱せり

おのふくむ(む)とて故(こ)とて受(う)けてはたおのふくむ  
ち(ち)とて此(こ)秘(ひ)事(じ)まらげとて終(つ)る(る)事(じ)を  
おのれと執(と)り功(こう)ふらる(る)事(じ)ハ修(しゆ)を(を)後(ご)明(めい)  
すべく(く)あ(あ)ら(ら)く(く)後(ご)を(を)せ(せ)ば(ば)純(じゆん)潔(けつ)の(の)事(じ)を(を)  
あ(あ)げ(げ)付(つ)合(あ)は(は)せ(せ)り(り)純(じゆん)潔(けつ)ハ(ハ)変(へん)化(か)と(と)年(ねん)  
べ(べ)く(く)せ(せ)り(り)極(ごく)ま(ま)る(る)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)  
茶(ち)を(を)煮(に)く(く)る(る)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)べ(べ)し  
か(か)ら(ら)ず(ず)也(や)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)

○純(じゆん)潔(けつ)の(の)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)

月(げつ)と(と)い(い)ふ(ふ)秋(あき)と(と)も(も)春(はる)と(と)も(も)冬(ふゆ)と(と)も(も)一(いち)と(と)云(い)ふ(ふ)事(じ)  
と(と)も(も)一(いち)と(と)云(い)ふ(ふ)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
おの(おの)の(の)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
松(しょう)風(ふう)も(も)おの(おの)の(の)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
例(れい)の(の)て(て)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
及(およ)び(び)が(が)ら(ら)ぬ(ぬ)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
其(その)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
終(つ)る(る)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)  
おの(おの)の(の)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)と(と)云(い)ふ(ふ)法(は)一(いち)如(に)く(く)り(り)

の(の)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)

の(の)事(じ)を(を)せ(せ)り(り)

西の目あの方とあり是あ人の体なりも  
タリとて只海に竹の葉とてやあらん

俳諧秘事流傳を終

秘事 賤跋

三居庵主人自算其朝其平日所  
父師進門與我書屋為小冊名以秘  
る賤益取諸韓非子以知必賤也能  
見百步之外而不自見其賤也雖然非  
欲術之以要譽於世人也夫古昔我賢哲  
於事也譬言必布帛之味而粟之味不  
可一日殺者也若夫滑稽者流亦為

則後尚浮華好藻飾務悅人目殆類鄙俗而已所謂巧女之刺綉雖精紉絢採初無補於實用者豈足以為貴耶故二居老人謂當世俳人之習非真俳道之事其友人言吾子自幼深志俳學至今殆不倦未嘗一日而廢讀俳中博洽精勤可謂識達俳道身然而不從子專

崇蕉門之蘊奧而惡泛濫駁雜以恭默寡言為務言音子面秉性也謙遜一不好為人師然聲望已甚異丁俗客亦致其敬雖遐方鄙陋之徒於識其名一不亦樂乎且是書也用國字字平易且立言也切實皆存其直情出肺腑臆者非浮虛巧飾之尤其由也

俳女也不寡矣豈當世俗戲言  
之云乎頃京師書肆田中氏請以  
壽于持鳥字古音子之少者茲以  
庶幾四方且將壅無二躬而不朽  
可謂壽年且息也已

宣政三年庚初冬

平安 亦來園勝伯順題



五橋 出原 宜伸書



古音先生著目錄

佛語近道大成二冊

凡季河寄切字七卷

佛語秘事少毛二冊 諸部秘文

古刀銘盡大全 九冊 新刻出来

古刀手鑑 折本一冊 同断

寛政三辛 亥年十月

京都書林 田中汲古堂



田中汲古堂



Handwritten text in blue ink, possibly a signature or date, located on a small piece of paper or parchment at the bottom right of the book cover.